



My stories in St.Paul

2023年度入学 グローバルコース M・M



進学先：都留文科大学教養学部地域社会学科
(総合型選抜)



STEP 1

地域と出会う



高校一年生の秋、私は初めて恩方地域での運動会補助ボランティアに参加しました。そこで目の当たりにしたのは、「普段は交流がない」と話していた地域住民の方々が、競技をきっかけに世代を超えて協力し、心から笑い合っている姿でした。地域に根ざした活動が、いかに人々の「つながり」を生み出し、活力を与えているのかを肌で感じ、強い衝撃を受けました。この出来事を機に、私は地域社会が機能するための「縁の下の力持ち」の存在に興味を持ち、受け身だった姿勢から、積極的に住民の方に話しかけ、活動に参加するようになりました。

STEP 2

地域と関わる



高校1年生の終わりから、パウロ坂の下「坂本ファーム」で援農ボランティアを。また、12月には獣害対策としてのゆずの収穫ボランティアに参加しました。高齢化が進む、恩方地域の暮らしの中に、どのような問題があるのかを知ることができた経験となりました。



STEP 3

地域を学ぶ



様々な活動に参加する中で、特に私の進路を決定づけたのが、過疎化が進む地域で活動するNPO法人「小津倶楽部」での経験です。ここでは、空き家対策や地域活性化に尽力する活動を通して、地域社会における「課題解決の難しさ」と「対話の重要性」を深く学びました。

小津倶楽部の代表の方からは、「地域を元気にしたい」という前向きな活動への思いに感銘を受けました。しかしその一方で、地域の伝統を継承する活動に携わる地元の方からは、「伝統は地域に住む人たちの手で守るべきであり、外部の人が関わることに戸惑いがある」という、異なる価値観に基づく意見を伺うことになりました。

STEP 4

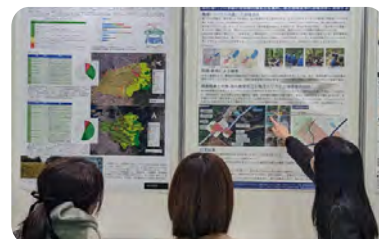
進路を決める



地域を思う気持ちは同じであっても、立場や背景が異なることで、意見が対立することがあるという現実と直面し、深く考えさせられました。この経験から私は、課題を解決するためには、単に理論や計画を実行するだけでなく、地域に暮らす人々の歴史や文化、そして複雑な感情に丁寧に耳を傾け、多様な価値観を持つ人々が対話を通じて合意形成を図るプロセスそのものが最も重要であると痛感しました。

高校3年間を通じて、私は「なんとなく」の日々を送っていたところから、地域住民の感情を尊重し、「対話を通じて課題を乗り越えるプロセス」に主体的に強く関わりたいと願う人間へと成長することができました。

この主体的な姿勢と、地域社会における課題解決への強い意欲こそが、高校生活最大の成長であり、都留文科大学で地域社会学を専門的に学びたいと志す原動力となっています。

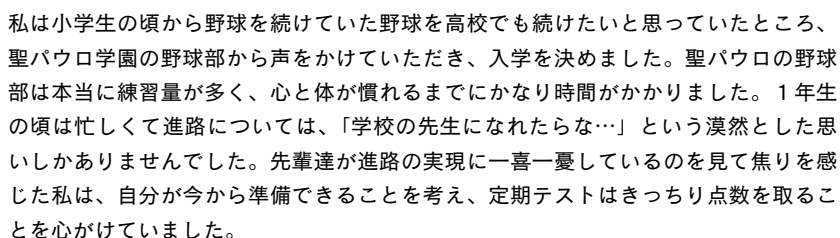




2023年度入学 グローバルコース H.K



進学先：上智大学文学部国文学科
(カトリック高等学校対象特別入試)



STEP 2 国語の魅力に気づく

聖パウロ学園の授業は、探究的な活動が多いです。探究の時間はもちろん、地理総合、家庭基礎、古典、保健など、様々な教科で教科書の枠を超えた、自ら調べ考えを広め、深める活動を行いました。その中で最も楽しく感じたのが国語でした。例えば、二葉亭四迷の『浮雲』と森鴎外の『舞姫』はほぼ同時に書かれているにもかかわらず、書かれている文体が異なっていることなど、様々なことを知り、古典と近代文学の連続性や当時特有の情緒に興味を持ち、大学では国文学を学ぶよう決意しました。

実際に授業で発表した『源氏物語』の登場人物、夕顔についての探究スライドの一部

登場、性格、身分

登場 「夕顔」のみ

性格 女の苦悶気は、驚くほど寂寥感をおとりとしていて、深味や情量は少なく、とにかく若々しいような感じが、男女の仲を知らないわけでもない、たいてい高貴な身分になるだろうと、どこかで心が豊かになるのだろうか、と繰り返し光澤氏はお思っている。と光澤氏は押し合っている。見た目は無常。

解説 父は三位中将。しかし意地悪な親ではない。源中将(とうのちゅうじょう)の元カメ。(子持ち)

お祭りでの出店のボランティア活動



STEP 3 上智大学に憧れる

1年生のときのキャンパス訪問という行事で、私は上智大学を訪れました。学生の様子や立地、建物を見て、「この大学しかない!」と感じて、私は上智大学を志すようになりました。その後、上智大学の国文学科に進学した先輩のお話から、憧れから確かな志望校と変わっていきました。私が利用した「カトリック高等学校対象特別入学試験」は英検2級が必須だったので、まず英検の勉強をしなければなりませんでした。しかし、私は英語が最大の苦手で、さらに野球部で多忙の日々だったため、正直、望み薄に感じていました。



英検2級合格に向けて、英語科や担任の先生が学習計画を立ててくださり、何度も試験に落ちつつも弱点を少しずつ解決することで3年生の1学期によく英検2級に合格しました。

その後は、部活動、委員会、ボランティア活動で得た自分自身の強みを言葉にしていくなために、担任の先生やメンターの先生と対話をして自己分析を深め、志望理由書を何度も書き、添削してもらいました。さらに面接対策も、多くの先生方が協力してくれました。そのお陰で上智大学を含む3校（武蔵大学・武蔵野大学）に合格することができました。聖パウロの少人数指導や、温かい環境が、私の進路を強力にバックアップして支えてくれたと思います。

大学入学まで、一般受験で入学してくる未来の仲間と恥じることがないように、学習も真剣に継続します。

今後は、日本文学の特異性、日本文学の情緒に着目した研究を大学で行い、国語科の教員として日本の文学の魅力を中高生に伝えると同時に、生徒に寄り添える教員を目指します。



Instagram



Facebook



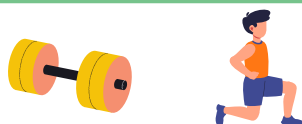


My stories in St.Paul

2023年度入学 セレクティブコース K.S



進学先：白梅学園大学子ども学部教育学科 (総合型選抜)



STEP 1 なんとなくキャリプロ



高校に入学して、趣味の筋トレに明け暮れ、友達と楽しく過ごす毎日でした。学校への遅刻や忘れ物も多く、担任の先生にはよく注意を受けていました。家でも、親の言うことは聞き流していることが多かったです。進路は、筋トレに興味があったので「パーソナルトレーナー」になることに漠然と憧れていました。しかし、特に勉強を頑張るわけでもなく、赤点をとらないことを目標に、最低限のテスト勉強をするくらいでした。

高校2年生になり、担任の先生から小学校の運動会のボランティアをすすめられました。ちょうど暇だったので、なんとなく参加してみたのがキャリプロとの出会いです。

STEP 2 「素の自分を出していい」



私が参加したのは、七国小運動会のお手伝いでした。小学校2年生の担当となり、教室から校庭へ椅子を持って移動することの手伝いや、子どもたちが競技にスムーズに参加できるように整列を促したりダンスの衣装の準備を手伝いました。また子どもたちの座席の間に入って、他学年の競技と一緒に観覧しました。子どもたちはすごく素直に自分に話しかけてきて、その対応をしている私は、自分でも驚くほど「素の自分」でした。そして、そんな「素の自分」をたまたまそばで見ていた小学校の副校長先生がほめてくださいました。斜に構えて高校生活を送っていたけれど、子どもたちの前で「素の自分」をほめてもらえたことで、自分はこんなふうでいいんだと肩の力が抜けました。その後の学校生活は、色々なことにまっすぐ取り組めるようになり、クラスメイトとの関係も変わっていききました。また、子どもたちとの関わりが純粋に楽しかったので、七国小学校での学習支援、元木小学校での学習支援や放課後子ども教室のお手伝い、八王子国際協会で日本語を母語としない子どもへの学習支援（高校2年生の2学期～高校3年生の1学期）などのボランティアを継続しました。



STEP 3 進路に悩む

高校2年生から3年生の1学期まで、進路に悩みました。もともと興味があったパーソナルトレーナーになるのか、子ども関係の仕事を考えるのか。担任の先生や、メンターだった校長先生と話す中で、次第に「小学校の教員」という自分の希望が明確になっていきました。志望校も色々迷いましたが、パウロのように少人数で丁寧な学びの環境がある白梅学園大学を目指すことに決め、準備をすすめました。評定平均や検定なども意識するようになり、今までの自分と比べて、かなり学習への努力もするように成長したと思います。

STEP 4 頼られる存在として

ボランティアをする前の自分は、いろいろなことに積極的になれず、学校生活や勉強に対して後ろ向きなことも多かったように思います。趣味以外の何事にも真剣に取り組まない生活でした。でも、校長先生や担任の先生が勧めてくれたボランティア活動を通し真剣に活動するきっかけができました。運動会など、子どもにとって大事な瞬間に立ち会っていると考えるようになったり、小学校の先生の目線になって考えてみることで、見方や考え方が変わり、責任感が芽生えました。また、八王子国際協会で出会った子どもたちとは、1年間というスパンで信頼関係を築くことができ、やりがいを感じながら毎週のボランティアに行っていました。私の成長を、ボランティア先の小学校の先生も見てくださり、私を指名して手伝いに来てほしいと言われるまでになりました。キャリプロで私は進路を決めることができ、本当に貴重で意味のある経験ができたと思っています。





My stories in St.Paul

2023年度入学 グローバルコース T.M



進学先：東京農業大学地域環境科学部森林総合科学科
(指定校推薦)

STEP 1 「森の教室」づくり



高校1年生の時、「森の中に教室を作る」という響きに惹かれ、「森の教室project」に参加しました。先輩達と共に、パウロの森のどこに教室を設けるか計画を立て、草木の間伐、そしてウッドデッキづくりといった作業に汗を流しました。
完成した「森の教室」は、私にとって大きな達成感を与えてくれました。同時に、パウロの森が持つ無限の可能性を肌で感じさせてくれるものとなりました。

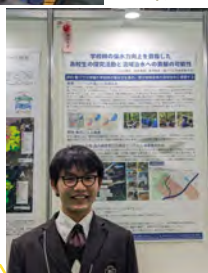
STEP 2 地域の課題から生まれた探究テーマ

2年生に進級し、本格的な探究活動が始まりました。テーマを「森」にしたいと考えたのは、2019年の台風でパウロ周辺に土砂崩れが発生したという事実でした。私は「土砂崩れを起こさない森づくり」に強い関心を持ちました。
しかし、いざ研究対象とすると、自分がいかに森について何も知らないかを痛感しました。この「無知の自覚」こそが、私の探究の原動力となりました。
すぐに東京農業大学の橋隆一先生に教を請い、研究室まで足を運び、専門的なレクチャーを受けました。さらに、法政大学の保清人先生からは「ランドスケープ」という、より広い視点からのご指導もいただきました。
先生方との対話を通して研究の方向性が見え、研究のための道具が必要だと考えた私は「関東水の緑のネットワーク」に助成金を申請しました。結果、30万円の助成をいただけることになり、研究が本格的にスタートしたのです。



STEP 3 実践と理論の融合：「流域治水」への挑戦

探究テーマを「流域治水」と定め、パウロの森の貯水力を高めるための実践的な取り組みに着手しました。
私たちは、土を掘り、「燐炭（くんたん）」を埋設することで土壌を柔らかいスポンジ状にし、貯水機能を向上させる実験を試みました。また、「しがらみ（土留め）」を設けて、土砂の流出をどれだけ防げるかを検証しました。
この取り組みをまとめたポスターを「グリーンインフラネットワーク・ジャパン全国大会」に出展したところ、「研究者・学生部門」で最優秀賞を受賞することができました。この受賞を機に、様々な大学の先生方や地域の方々に注目していただき、タウン誌などで何度も活動を取り上げていただくことができました。探究活動が地域社会に広がり、評価されたことは、何にも代えがたい経験となりました。



STEP 4 森を原点に、地域社会への貢献をする未来へ

高校3年間で、様々なキャリアプロへの参加や地域貢献活動を通じて、「将来は地域社会に役立つ仕事がしたい」という想いが漠然とした目標から、確固たる決意へと変わりました。
地域の問題は、社会学や社会福祉など、多角的なアプローチが可能です。様々な進路で迷いましたが、最終的に私は、自分の探究の原点である「森林」について、より深く、専門的に学べる東京農業大学への進学を選択しました。
私の高校生活は、「パウロの森」での一歩から始まりました。この学びの場を出発点に、大学という新たなフィールドで、地域社会への貢献という目標に向かって邁進していくことを楽しみにしています。

